

沖縄津堅島方言の場所格を表示する 格助詞の機能についての新しい知見

又 吉 里 美

I はじめに

〈先行研究〉

琉球方言の助詞の研究は多くの研究者によって、多様な研究が行われてきた。それらを筆者は次の三つにとりまとめた。

- 1、従来、形態論的な記述が中心で、必ずしも、助詞の構文論的な機能を明らかにしているとは言い難い。
- 2、標準語である日本語の助詞と琉球方言助詞との比較対照を行い、いわゆる学校文法の用語に基づいて琉球方言助詞の意味、用法を論述した研究が多い。
- 3、琉球方言助詞の使い分けについての研究は、主格の「ガ」と「ヌ」が目ざされ、その他の助詞については、ほとんどなされてこなかった。

〈問題の所在〉

1の点は、方言助詞研究の基本的なもので、研究の初期段階にあつては、形態論的な記述研究にならざるを得ない。詳しく言えば、琉球方言助詞についての精緻な研究はこれからであり、琉球方言研究の中では、必ずしもまだ盛んなものではなかったといえる。今後、一つ一つの集落を対象にした徹底的な記述研究を進めるためにも、発語主体の意図が強く関わる構文論的な記述手法による研究が求められるであろう。

2の点については、琉球方言が日本語の中の一方言であることから、考えられる比較方言学的手法である。ただし、琉球方言は標準日本語とは相当に異なった機能を持っていることを考えれば、標準日本語の体系にはおさまりきれないだろう。本稿で取り上げる格助詞の[kara]は標準日本語には見られない場所格を表す機能を持ち、それは、標準日本語の論理や体系で説明することは難しい。その他の助詞の機能を見ても、異なる機能が見られ、琉球方言における格助詞の体系と標準日本語の格助詞との体系が異なることは明らかである。両者を比較する前に琉球方言格助詞そのものの相互関係を綿密に記述する必要がある。そのためには、琉球方言格助詞内における格助詞相互の関係を分析し、助詞の機能を確定させる必要があると考える。

3の点については、いままでに内間直仁をはじめ、野原三義、柴田武らによる研究がある。ところが、格助詞「ガ」と格助詞「ヌ」以外の助詞が研究対象となることは少なく、諸助詞相互の関係は、まだ十分に明らかにされていない。近年、「ガ」と「ヌ」以外の助詞の使い分けについての研究もなされるようになってきたが、それらは標準日本語との対照研究になりがちであった⁴⁾。これは、2の点でも指摘したように、対照研究であり、歴史研究に属するものとみなすことになり、必ずしも確実な記述的手法とは言い難い。そこで筆者は、琉球方言内での助詞の使い分けを明らかにし、助詞の機能を確定する必要があると考えるものである。

以上、先行研究についての分析を通して、本稿では、次の三つの目的を設定する。なお、本稿では琉球方言に属する津堅島方言を対象とする。

〈本稿の目的〉

- 1、沖縄津堅島方言における場所格表示の機能を担う格助詞として、「[N&#i] ンジ」「[uti] ウティ」「[Nka] ンカ」「[kara] カラ」の四つがあることを仮に見出している。これらの助詞の機能を明らかにするために、構文論に基づき、後続する動詞に注目し、名詞、格助詞、動詞の結合関係から格助詞の機能を明らかにする。特に、「動词语彙」カテゴリーの「動作、存在、移動、状態」を発話者がどのように認識仕分けたか、そこから生じる機能差に、すなわち発話者の焦点がどこにあるかに注目し、それぞれの格助詞が担う機能を確定することを目的とする。
- 2、津堅島方言については、場所格に関する助詞の使い分けの研究がない。その上、琉球諸方言についても場所格の機能差および使い分けを究明した研究は管見では知り得ていない。そこで、筆者は津堅島方言に特化して場所格表示の機能を担う格助詞に焦点をあてて、研究することにした。
- 3、ただし、標準日本語との対照研究は行わず、津堅島方言内における格助詞の相互関係を明らかにすることを目的とする。

〈津堅島について〉

津堅島は、沖縄本島中南部西海岸の与勝半島の南東約5kmに位置する。平成17年4月1日、具志川市、石川市、勝連町、与那城町の2市2町の合併により「うるま市」が誕生し、それまで、勝連町であった津堅島も沖縄県うるま市勝連津堅と住居表示されることになった。生業は漁業と農業が中心で、特に農業においてはニンジンの栽培が盛んである。沖縄本島との交通手段は、平敷屋港からフェリーと高速船が出ており、1日に10～11往復している。地理的には沖縄本島の



中南部に位置するが、言語的位置づけでは沖縄北方言に属するとされている。

〈資料について〉

本資料の文例は自然傍受法によって得られたものを主としている。調査年月は2005年4月から11月までである。なお、国際音声記号による音声表記、カタカナによる音声表記、共通語訳の順に表示する。また、文例の後に括弧で誰から誰への発話であるかを略号で示している。omは老人男子、ofは老人女子、mmは中年男子、mfは中年女子、ymは少年男子、yfは少年女子である。Iは、筆者の又吉里美を示す。→は会話の方向を示す。

なお、自然会話で収集した事例には文例の冒頭に○印を付している。ただし、*は非文であることを示す。また、文例には通し番号を付している。

II 場所格を表示する格助詞の機能

場所格を表示する格助詞には*2 「[Nɔ̃i] ンジ」「[uti] ウティ」「[Nka] ンカ」「[kara] カラ」の四つの助詞を見出している。

II-1 場所を場所そのものとして認める「[Nɔ̃i] ンジ」/「[uti] ウティ」

i 動作や行事が行われる場所を表示する「[Nɔ̃i] ンジ」

[Nɔ̃i] の機能は動作や行事などが行われる場所表示の機能である。

1. Oaraka:Nɔ̃i miɕi kuruku:beʃi iʃi./アラカーンジ ミジ クルクーベチ イシ。/アラカー(井戸の名前)で水汲んできなさいと言って。(of→I)
2. Oje usuga:Nɔ̃i Nmu aratiku:be./イエ ウスガージ ンム アラティクーベ。/え(おい)、ウスガー(井戸の名前)で芋洗ってきなさい。(of→mf)
3. Okinu' gakko:Nɔ̃i keNʃiN atare./キヌー ガッコージ ケンシン アタレー。/昨日、学校で検診あったか?(mm→mm)
4. Oja:Nɔ̃i piʃi reNʃu:sakuru./ヤーンジ ピチ レンシューサクル。/家でしょっちゅう(歌の)練習している。(of→of)
5. Ouma saNe:Nɔ̃i isataNba./ウマ サンエージ イサタンバ。/ここ(の)サンエー(スーパーの名称)で会ったの?(of→of)
6. OpukaNɔ̃i aʃiburu ʃu:nu u:mi. kaɕini tuba:ruNro./ブカンジ アシブル チューヌ ウーミ。カジニ トゥパールンロ。/外で遊ぶ人がいるか。風に飛ばされるよ。(of→yf)

これらは「芋を洗う」「検診がある(行われる)」「練習する」「会う」「遊ぶ」という動作行為、行事開催などと関係のある動詞と結合し、動作や行事開催が行われる場所表示の機能を持っている。特に、行事などが「ある」という時には [Nɔ̃i] が結合するが、単純に物が「ある」、人や動物が「いる」という時には [Nɔ̃i] は結合しえない。[*tanaNɔ̃i

aNro.] / *タナンジ アンロ. / *棚であるよ。][*pamaNɕi uNro.] / *バマンジ ウンロ. / *浜でいるよ」は非文となる。すなわち、[Nɕi] は存在動詞ではなく、動作動詞、行事開催表示動詞（「検診がある」の「ある」など）の動詞と結合するのである。しかし、次のような文例も聞かれた。

7. OpuninusubaNɕi uttsuNro. / プニヌスバンジ ウツツンロー. / 船の隅で置いているよ（船の隅に置いているよ）。(of→of)

この文例は、先に荷物を船に載せておくように頼まれた人が、船の隅に荷物を置いたことを報告する場面で発せられたものである。船の隅に荷物を移動させ、そこに荷物があることを示し、荷物の存在場所を示しているように見える。しかし、多くの場合、動詞「置く」との結合が強い格助詞は [Nka] であり、後に記載している文例18にも見られる。この他、「[puninusubaNka uttsuNro:] / プニヌスバンカ ウツツンロー. / 船の隅に置いているよ。」「[imigwa:Nka utsuibinro:] / シミグワーンカ ウツイビンロー. / 後ろの部屋に置いていますよ。」「[tsukuenui:Nka utsukibe.] / ツクエヌイーンカ ウツキベ. / 机の上に置（いておき）きなさい。」などの文例が聞かれ、[Nka] が現れることが多く、「[utsuN] 置く」と [Nɕi] が結合することは希である。「置く」という動詞の性質は移動と停留の性質をもち、停留は存在と関わる性質で、存在と関わり深い格助詞 [Nka] が承接するのは一般的に考えられることである。

そこで、先に挙げた文例は次のように考えることができる。「ウツツンロー」は「置いている」という自分の動作を表している。すなわち、物の移動に焦点があるのではなく、船の隅で「置く」という動作をしていることに焦点があつた（話者の発話意図が表示された）表現であり、「置く」という動作の結果として荷物が「船の隅に置」かれていることを相手に伝えるという構造になっていると考えることができる。つまり、文意に反映される機能は「荷物の存在場所」を示し、一見、存在場所を表示しているかのように見えるが、その内部構造は「置く」という「動作の行われた場所」を示し、その場所は物の移動先と重なるので、結果として、荷物のありかを表すという構造になっていると考えられる。したがって、上の文例は「船の隅で置いている」という自分の動作が行われた場所表示であると考えることができる。

「置く」のように動詞が「物の移動と停留」と「物を移動させる動作」という二つの意味を持つ場合、その動詞の意味によって、取りうる助詞が異なる。「置く」の場合、「物の移動と停留」という意味を取れば [Nka] が承接し、「物を移動させる動作」という意味を取れば [Nɕi] が承接する。このような動詞は多くあり、「汲む」という動詞も「物の移動」と「物を移動させる動作」の二つの意味を持つ。「物の移動」の意味を取れば、[kara] が承接する。後に掲載している文例21の「アラカーカラ ミジ クルクーベチイシ. / アラカー(井戸の名前)から水汲んできなさいと言って。」がその例である。一方、「物を移動させる動作」の意味を取れば、[Nɕi] が承接し、文例1の「アラカーンジ ミ

ジ クルクーベチ イシ。／アラカー（井戸の名前）で水汲んできなさいと言って。」となる。動詞が二つの意味を持つ場合、それぞれの意味によって結合する助詞に違いがある。また、[Nɕi] と関係の深い格助詞として [uti] がある。

ii 動作や行事が行われる場所を表示する「[uti] ウティ」

[uti] の機能は、[Nɕi] と同様で、動作や行事などが行われる場所表示の機能である。

8. OhoNto:uti mata kamimuraʃeNʃe:ta:ʃi ikuNʃuN.／ホントーウティ マタ カミムラシェンシェータシ イクンチュン。／本島で、またカミムラ先生たち（の所）に行くって。(of→om)

9. Ounuʃunu nahautiru jo:saiteN suiga waN tarumigakiʃi tarumatti mata nahaf i Nɕi.／ウヌチュヌ ナハウティル ヨーサイテン スイガ ワン タルミガキシタルマッティ マタ ナハシ ンジ。／この人が那覇でぞ洋裁店するが、私を頼みにきて、頼まれて、また那覇に行って。(of→I)

10. OiN amauti ʃiɕuʃuharue.／イン アマウティ シジュチュハルエ。／そう、あそこ（中部病院）で手術しているよ。(of→of)

11. OaNʃi kaɕi pukini pukauti aʃiburu ʃu:nu u:mi.／アンチ カジブキニ プカウティ アシブル チューヌ ウーミ。／こんな台風時に、外で遊ぶ人がいるか？(of→yf)

[uti] は [Nɕi] と同じ機能を有している。その機能に差異はあまり認められない。それは、6と11の文例を見れば明らかである。両者ともほぼ同じ内容であり、表現である。[uti] と [Nɕi] との差異をあえて、言うならば、使用頻度という量的な違い程度である。[uti] の使用頻度は [Nɕi] の10分の1程度と、[uti] の使用頻度は低い。³先行研究によると、[Nɕi] と [uti] の出自には違いがあることが指摘されている。[Nɕi] は「にいて（に居て）」であると考えられている。また、[uti] は「おる（居る）」の变化形と考えられている。また、生塩氏の研究では、伊江島方言における「ウティ」は沖縄本島からの移入語である、と指摘されている。それぞれの出自は異なると考えられるが、津堅島方言において、頻度の違い以外に差異は見いだせない。しかし、いずれも [Nɕi] 同様、[uti] も場所を場所そのものとして認めるだけでなく、動作行為の行われる場所に焦点をあてて表示する機能として働いているといえる。ただし、[uti] は使用する頻度が低い。

II-2 場所を存在空間として認める「[Nka] ンカ」

[Nka] は存在動詞との結合が強く、場所を存在空間として捉え、機能に反映させている格助詞である。

i 人や物の存在場所を表示する

12. Oʔi ʔi ja:Nka uNro:.／ツイツイ ヤーンカ ウンロー。／うん、うん、家にいる

よ。(of→I)

13. OamaNka takubui miʃenu aije./アマンカ タクブイ ミシエヌ アイイエ。/あそこに二軒店があるよ。(of→I)
14. Ohe:baraNka saNbasaN u:teNja./へーバランカ サンバサン ウーテンヤ。/南風原に産婆さん(が)いたよね。(of→of)
15. OhigaʃeNʃe:ga ari juNtakunuhuNka a:hje./ヒガシェンシェーガ アリ ユンタクヌホンカ アーヒエ。/ヒガ先生の、あの、ゆんたく(書名)の本にあるよ。(of→I)

ii 人の停留/占有場所を表示する

16. Opiʃi ja:Nka kumatujeja./ピチ ヤーンカ クマトウイエヤ。/しょっちゅう家に籠もってるよ。(of→of)
17. OmaNnakaNka ru:ja niNtite./マンナカンカ ルーヤ ニンティテ。/真ん中に自分は寝てね。(of→of)

iii 物を移動させ、その移動先である停留場所を表示する

18. OpuninusubaNka utsuibiNro:./プニヌスバンカ ウツイビンロー。/船の隅に置いていますよ。(of→of)
19. Oka:miNka ʃikitukibe./カーミンカ シキトゥキベ。/(豚肉は)甕に漬けておきなさい。(of→mm)
20. Ora:ra: uriNka i:raja./ラーラー ウリンカ イーラヤ。/どれどれ、これ(袋)に入れようね。(of→of)

先にも少し述べたが、[Nka] は [Nɕi] や [uti] と違い、場所に人や物が存在していることと関係がある。[Nɕi] や [uti] が動作行為が行われる場所を表示して、動作や行為自体に焦点があるのに対して、[Nka] は人や物の存在に焦点がある。iの存在場所を表示する機能においては「ある」「いる」といった動詞が結合していることから、[Nka] が存在動詞との関係があることは一目瞭然である。また、iiの人の停留場所を表示する機能においても、「籠もる」「寝る」といった動作と同時に、「とどまっている」ということに焦点がある。iiiもiiと同様に物の移動と同時に、物の停留に焦点がある。iiもiiiも結局は停留、停止という形態で、存在へと集約されるのである。したがって、存在動詞と関わり深い [Nka] が承接すると考えられる。

II-3 場所を出どころ、移動動作空間、動作(状態)継続空間として認める「[kara] カラ」

津堅島方言における格助詞 [kara] には多くの機能がある。空間の起点や時間の起点、物事の順序の起点、手段、方法、原因などの表示機能である。それらに加えて、場所を表示する機能がある。このように [kara] は多くの機能を有しているが、場所を表示する機

能に関しても、先の [Nq̄i] [uti] [Nka] とは比較にならないほど、多彩な機能を持っている。また、[kara] の場所格と手段格との間に密接な関わりが見出せる。したがって、本項では場所格と同時に手段格をも併せて考察し、その相互関係を明らかにする。

A. 場所格の「[kara] カラ」

場所を表示する機能の中には先に挙げた「空間の起点」の表示機能とは別の働きもある。特に、移動動作動詞の「歩く」「走る」などの動詞と結合関係を持つ機能は、津堅島方言のみならず、琉球方言一般に認められる機能である。しかし、その機能の捉え方は諸研究者によって異なり、多くは「動作の行われる場所」というようにまとめられている⁴⁴。しかし、[kara] の持つ機能は「動作の行われる場所」と一括するには難があり、分轄して詳細な機能を表示することが必要だと思われる。したがって、本稿では場所格の [kara] として、その機能を出どころ表示、移動動作空間表示、状態（動作）継続空間表示の三つの機能に分けてとらえることとする。

i 出どころを表示する

21. Oaraka:kara miq̄i kuruku:beʔi iʔi./アラカーカラ ミジ クルクーベチ イシ。/アラカー(井戸の名前)から水汲んできなさいと言って。(of→I)
22. Ose:kjo:kara ko:iNro./セーキョーカラ コーインロ。/生協から買っているよ。(of→of)
23. OusuNtunu ka:mikara Nq̄aʔiku:be./ウスントゥヌ カーミカラ ンジャチクーベ。/台所の甕から出してきなさい。(of→I)
24. Owatta:kara muʔikisurumunu je./ワッターカラ ムチキスルムヌ イェ。/私たち(の家)から持ってきているのに、え。(of→of)

上記の文例において、「水」は井戸から湧くものであり、「商品」はお店にあるものである。つまり、水や商品の出どころが「アラカー」であり、「生協」である。文例21は文例1の「アラカーンジ ミジ クルクーベチ イシ。/アラカー(井戸の名前)で水汲んできなさいと言って。」と比較すると、伝達内容に差はない。しかし、その構文関係を考えてみると、「アラカーンジ」という文例は「汲む」という動作自体に焦点があるのに対して、文例21は「汲む」ものの出どころに焦点がある。これは、先に説明した「置く」と同じ構造である。すなわち、「汲む」は「物の移動」と「物を移動させる動作」の二つの意味を持つ。「物の移動」の意味を取れば、[kara] が結合するのである。

上記の「汲む」「買う」「出す」「持ってくる」は取り出す性質を持った動詞であり、[kara] がその動詞の性質に反応して、物のある場所を表示するのである。したがって、これらは物の出どころを表示する機能を持っていると言える。

ii 移動動作場所を表示する

25. Otidami:kara atʃakumi. / ティダミーカラ アッチャクミ. / 太陽の中を歩くのか? (太陽の下 (陽差しの中) を歩くのか?) (of→I)
26. Oari nu:akira:ʔtaga arje arje hokkaido:kara atʃakunu nu:N kiraraN ʃu:nu u:taNro. / アリ ヌーアキラツタガ アリエ アリエ ホッカイドーカラ アッチャクヌ ヌーン キララン チューヌ ウータンロ. / あの、何アキラだったか? あの、あの、北海道を歩くが、何もあげられなかった (もらえなかった) 人がいたよ。 (of→I)
27. Oantʃi kaçipukini pukakara atʃakuru. / アンチ カジプキニ プカカラ アッチャクル. / こんな台風の時に、外から歩いている (のか)? (of→I)
28. Oʔaʔke: aminakara atʃikiʃi. / ヲアツケー アミナカカラ アッチキシ. / あら、雨の中を歩いてきて。 (of→I)
29. Oarje je uNdo:ba:kara pa:e:sakuwa. / アリエ イェ ウンドーバーカラ パーエーサクワ. / ほら、え、運動場を走っているよ。 (of→I)
30. OareN mutʃume. umakara oroorosakuje. / アレン ムチュメ. ウマカラ オロオロサクイエ. / あれも (婿) 持っているか? (婿は持っていないよ。) ここをうろうろしているよ。(結婚しないでいることをいっている。) (of→of)
31. Osura:rutuinu tiNkara turakuNro je. / スラールトゥイヌ ティンカラ トウラクンロ イェ. / きれいな鳥が空を飛んでいるよ、え (ほら)。 (of→I)

以上の文例を見ると、「歩く (歩いて来る)」「走る」「おろおろする」「飛ぶ」という移動動作の性質を持った動詞が結合している。25~28の文例においては、歩く空間が「ティダミー (太陽中)」「北海道」「外」「雨の中」であり、歩くという移動行為が行われている空間を表示するのである。しかも、これらの名詞は「空間」ということがかなり意識されているようである。野原氏の研究の文例に、ティダカラという表現があったので、以下の例文の確認をしてみた。すると、次のような例文は津堅島方言では言わないとのことである。

32. *tidakara atʃakumi. / ティダカラ アッチャクミ. / 太陽を歩くか。

33. *amikara atʃikiʃina. / アミカラ アッチキシナ. / 雨から歩いてきてな。

上記例文の確認のたびに「ティダミー (太陽中「ミー」は「中」を意味する。))」「アミナカ (雨の中)」と強調されるのである。このことから、移動行為が行われるのは「空間」として意識されていると考えられる。すなわち、このような場合、[kara] は「場所格」として認定できるが、その場所を「空間」として認識しているように思われる。とすると、29も同様に走っている「運動場」も空間として認識されているのかもしれない。また、30の文例は比喩表現であるが、「オロオロサクイエ」というのは「うろうろしているよ」ということであり、文意は結婚もしないでこのあたりをうろうろしている、すなわち、独身であることを意味するが、「うろうろする」ということは移動行為の擬態表現である。

「ウマ (ここ)」はこの場合、狭義的には話者の家の周辺を指すが、広義的には津堅島一带と考えることができる。したがって、「ウマ (ここ)」は「オロオロ」する移動行為が行われている空間として位置づけられる。31の「ティン／空」に至っては、二次元的な平面ではなく三次元的な空間を持つので、場所というよりも空間という概念の方が認識の仕方としてはより近い認識の仕方かもしれない。

いずれにしても、[kara]は移動動作動詞との結合が強く、移動動作場所を表示する機能として働くといえる。

iii 動作(状態)継続場所を表示する

① 現在における動作(状態)継続場所の表示

34. O/imaNka ima:raNriba. ho:mukara ima:ru Nriba./シマンカ イマーランリバ、ホームカラ イマーランリバ。/島にいらっしゃらないの？ ホームにいらっしゃるの？ (of→of)

35. Oamakara u:ruhaçiro.kazumita:Nkaru uNtsuN./アマカラ ウールハジロ、カズミターンカル ウンツン。/あそこにいるはずよ。カズミたちのところにぞいるって。(mf→of)

36. Oarje: ginowaNfikara sigutusu:ru./アリエー ギノワンシカラ シグトゥスール。/あれは宜野湾市で仕事している。(mf→mm)

37. Okazu:ga i:nu arifi bjo:iNkara keNsaçunfi bjo:iNfiga ho:ratiçifi keNsaçunfi watta:nu aNçiru kuNnage: hoNto:kaja:suru./カズーガ イーヌ アリシ ビョーインカラ ケンサフンチ ビョーインシガ ホーラティチシ ケンサフンチ ワッターヌ アンチル クンナゲー ホントーカヤースル。/カズが胃のあれして(胃の調子が悪くて)、病院で検査するって、病院に連れて行って、検査するといって、私たちはこんなしてこんなに長く、本島通いしている。(of→of)

② 過去経験における動作(状態)継続場所の表示

38. Oisugwa: fine: rihabiriseNta:kara urumunu./イスグワシネー リハビリセンターカラウルムヌ。/盆にはリハビリセンターにいるのに。(of→of)

39. Owatta:ga ki:ne amakara u:çutu./ワッターガ キーネ アマカラ ウーグトゥ。/私たちが(島に)来たときには、(アカミーは)あそこに(リハビリセンター)にいるから。(of→of)

③ 未完了動作(状態)継続場所の表示

40. Oo:çikara sigotosurutoki tsukeruno./オーチカラ シゴトスルトキ ツケルノ。/おうちで仕事するとき着けるの。(of→l)

41. Ourena purukunatugutu na ja:kara kija: hi:ruru. /ウレナ プルクナトウグトゥ
ナ ヤーカラ キヤー ヒールル. /これは古くなっているから普段着(家から着る
もの)にしよう。(of→of)

上記の①②③の文例は「いる」や「する」という動詞と結合している文例である。これらを見ると、「ンカ」同様、存在場所を表示する機能として考えられる。しかし、ここで、34の文例に注目してみたい。

34. OjimaNka ima:raNriba. ho:mukara ima:ru Nriba. /シマンカ イマーランリバ, ホーム
カラ イマルンリバ, /島にいらっしやらないの? ホームにいらっしやるの?

同じ「イマル (いらっしやる)」という動詞が承接しているにもかかわらず、一方は [Nka] が用いられ、もう一方は [kara] が用いられているのである。このことから、承接の違いは動詞が持つ本質的な性質による違いではないと考えられる。

また、過去経験における動作継続を表す場合、未完了のことがらの動作継続を表す場合、にも [kara] が用いられる。38、39の文例は発話時と発話内容とに時間のずれがある。つまり、お盆は発話以前の過去のことであり、ならば、過去形で表示されてもよいだろう。つまり「ウルムヌ」ではなく、「ウータムヌ」と表現されてもいいはずであるが、そのような形態をとっていない。38、39二つの文例ともに、発話時点で、話題の時間は過去なのだが、過去形「ウータムヌ」「ウータグトゥ」の過去形表示ではなく、状態継続の「ウルムヌ」「ウータグトゥ」で表示されている。また、結合する動詞も「いる」や「～する」などの存在動詞やする動詞が多く、動作または状態継続として考えることができる。また、③にあげた41は慣用的な言い方である。「ヤーカラキヤー」で「普段着」を意味する。ただ、「着る」という動詞を含めて考えても、上記の文例に共通なのは動作または状態の継続である。したがって、[kara] は動作(状態)継続の性質を表す動詞と結合して、動作(状態)継続の場所を表示する機能を持つといえる。

B. 手段格の「[kara] カラ」

[kara]がもつ手段格は場所格の機能に通じるものがあると思われるので、手段格も併せて考える必要がある。さて、その手段格であるが、津堅島方言には道具・手段を表す手段格が [ʃi] [Nka] [kara] の3種類あり、それぞれ、動詞の性質や名詞の性質によって承接する格助詞が異なる。すなわち、3つの助詞に使い分けが見られるのである。

i [ʃi] (ッ)シ

ある動作をするのに必要な道具や手段を示す場合には、[ʃi] を承ける場合が一般的である。たとえば、次の例のように格助詞の [ʃi] が使われる。

42. Oti:ʃi ʃiti ʃimuwa. /ティーシ イーティ シムワ. /手で入れていいよ。(of→I)

43. Oʃuri:ʃi kakutaNro. /フリシ カクタンロ. /筆で書いたんだよ。(of→I)

ii [Nka] ンカ

道具や手段を表示する場合に [Nka] が承接することがある。この場合、[Nka] が承接する名詞には体積や容積を有する性質をもつという条件がある。たとえば「ナービ(鍋)」「イチリンサー(*5 一輪車)」「パーキ(桶)」「アンラー(油)」など体積や容積を有する名詞に [Nka] が承接する。

44. ○Nmunjiana:biNka ni fi Nmu katutaNro:/ンムニヤナーピンカ ニシム カトウ タンロー。 / 芋煮る鍋に(で)煮て、芋食べていたよ。(of→of)
45. ○iʔiriNsa:Nka muʔiikaNga./イチリンサーンカ ムチイカンガ。 / 一輪車に(で) 持って行かないね? (of→mm)

iii [kara] カラ (情報発信・獲得手段表示)

[kara] が承接する名詞は情報源としての役割の性質を持っている。情報を「発する」媒体である。

46. ○terebikara haNtagaja./テレビカラ ハンタガヤ。 / テレビでして(放送して) いなかったかね? (of→of)
47. ○juki ʔutterutte nju:sukara itterujo./ユキ ʔッテルッテ ニュースカラ イッテルヨ。 / 雪降ってるって、ニュースで言っているよ。(of→I)
48. ○urena deNwa ʔo:kara tume:takuruba:te./ウレナ デンワチョーカラ トウメータクルパーテ。 / これ(隣にいる夫を指す)は、(電話番号を)電話帳で探しているわけ。(of→of)

上に挙げた文例において、[kara] に承接している名詞は「テレビ」「ニュース」「電話帳」である。すなわち、これらは情報源としての役割を持っている。特に「テレビ」や「ニュース」は情報を「発する」媒体であり、それを受け止めているのである。「電話帳」にしても情報がすでに存在しているわけであり、その点では常に情報を「発している」と考えられる。このような情報発信・獲得手段表示機能は先に挙げた場所格における出どころ表示機能に通じるものがある。

iv [kara] カラ (移動手段表示)

移動の手段を表示する場合、[kara] が用いられる。

49. ○ʔippuNgurai ʔiteNʔakara ikuru umaNka pamanu aNʔuigate./ジップングライ ジテンシャカラ イクル ウマンカ パマヌ アンチュイガテ。 / 十分くらい自転車でいったそこに浜があるというかね。(of→of)
50. ○kinu: takuʔi:kara Nʔagutu./キヌー タクシーカラ ンジャグトウ。 / 昨日、タクシーで出たから(行ったから)。(of→of)
51. ○ʔi:sai kuribunikara ikijotta./チーサイ クリブニカラ イキヨッタ。 / 小さい

くり船で行っていた。(of→I)

52. Okurumakara fisaNna. /クルマカラ シサンナ. /車で来たの? (of→I)

53. Oɕu:ɕinupunikara fisaNɸuN. /ジュージヌブニカラ シサンチュン. /十時の船で来たって。(of→om)

上記の文例を見ると、[kara] の結合している動詞が「行く」「来る」の移動を表す動詞であることに注目することが出来る。これは「移動を表す動詞」ということを考えれば、先にあげた「移動動作場所を表示する機能」と無関係ではないように思われる。「歩く」「走る」は運動動詞の主体動作、「行く」「来る」は運動動詞の主体変化と、動詞の性質がわずかに異なる。運動動詞における主体動作か主体変化かの違いが機能差を生じさせており、運動動詞の主体動作の場合は「移動動作場所を表示する機能」となり、運動動詞の主体変化の場合は「移動手段表示機能」となるのである。これら道具・手段表示機能は「移動」という動詞の性質と関連があると思われる。

以上のように、共通語では、ほとんど「で」で表示している道具・手段の表示を津堅島方言では名詞や動詞の性質によって、少なくとも三つの助詞で使い分けられていると考えられる。なかでも、[kara] はさらに情報発信・獲得手段表示と移動手段表示の二つの機能を持っている。そして、それらは場所格との関わりがあると考えられる。

III 結論

一、本稿では、助詞の機能を、後続する動詞の意味性質に注目し、名詞、格助詞、動詞の結合関係から確定した。特に、「動詞語彙」カテゴリーの「動作、存在、移動、状態」を発話者がどのように認識仕分けたかが機能差を生じさせていることを見出した。動詞の意味性質に基づいて、発話者が場所を「場所」そのものとして認識する場合、場所を「存在空間」として認識する場合、場所を「出どころ」として認識する場合とで取りうる助詞の違いが生じるのであり、すなわち、助詞が使い分けられるのである。

本稿で取り上げた助詞の場所格の機能をまとめると、次の通りである。

- 1、場所を場所そのものとして認める「[Nɕi] ンジ」 / 「[uti] ウティ」
 - i 動作や行事が行われる場所を表示する
- 2、場所を存在空間として認める「[Nka] ンカ」
 - i 人や物の存在場所を表示する
 - ii 人の停留 / 占有場所を表示する
 - iii 物を移動させ、その移動先である停留場所を表示する
- 3、場所を出どころ、移動動作空間、動作 (状態) 継続空間として認める「[kara] カラ」
 - i 出どころを表示する ————— 情報発信・獲得手段表示 (手段格)

ii 移動動作場所を表示する ————— 移動手段表示 (手段格)

iii 動作(状態)継続場所を表示する

二、動詞が二つの意味を持つ場合、どちらを焦点化(話者の発話意図の表示化)するかによって、結合する助詞が異なる。たとえば、動詞に「物の移動」と「物を移動させる動作」のように二つの意味がある場合、どちらに焦点をあてるかによって、取りうる助詞に違いが生じるのである。文例1と文例21を比較すると、その違いが分かる。

1. Oaraka:Nđi miđi kuruku:betfi i fi./アラカーンジ ミジ クルクーベチ イシ。/アラカー(井戸の名前)で水汲んできなさいと言って。(of→I)

21. Oaraka:kara miđi kuruku:betfi i fi./アラカーカラ ミジ クルクーベチ イシ。/アラカー(井戸の名前)から水汲んできなさいと言って。(of→I)

文例1では、動詞の「物を移動させる動作」の意味に焦点がある。一方、文例21では、動詞の「物の移動」の意味に焦点がある。そして、文例1の「アラカー」は場所格の「動作が行われる場所を表示する」という機能を、文例21の「アラカー」は場所格の「出どころを表示する」という機能を、それぞれ助詞 [Nđi] [kara] によって与えられている。また、結合している助詞 [Nđi] [kara] も動詞「汲む」が持つ「物の移動」と「物を移動させる動作」の意味が作用し、いずれかを選択して結合するのである。

以上のように、格助詞の機能を、主に動詞の性質を中心に確定した。動詞が助詞の機能決定に関わり、それによって、場所格を持つ助詞の選択が行われているということが出来る。そして、それは動詞の語彙的な意味のみならず、動詞内に存在する意味の違いによっても結合する助詞が異なるということが指摘できよう。以上のことから助詞の使い分けには結合する動詞が関与しているといえる。

注

*1 名嘉真三成(2000)では、西原方言における格助詞「ンカイ」「ン」を取り上げ、主に方向格に関して、両者の意味の違いを明らかにしようとした研究がある。また、西岡敏(2004)でも、主に方向格に関して諸助詞の機能差に言及している。両研究とも日本語との対照研究という手法に拠っている。名嘉真氏が「ンカイ」は「へ」に、「ン」は「に」にあたることを前提としたのは早急すぎる気がする。また、存在動詞と「ンカイ」「ン」との結合関係の考察がないのは不十分であろう。西岡氏は「ンカイ」は共通語の「に」に、「カイ」は共通語の「へ」に近いと結論づけているが、連体修飾格を作る「ヌ」が後続すると、その対応関係は逆になるとしており、その問題を解消する必要があると思われる。

*2 以下、見出し以外の表示は、それぞれ [Nđi] [uti] [Nka] [kara] と表示する。また、本文中において、文例中の語彙の引用はカタカナ表記による音声表記を基本とし、適宜、国際音声記号による音声表記を付すものとする。

- *3 金城朝永(1944)によると、那覇方言の「wutiは「をる」(居る, wuru)の終止形 wuŋの下略形 wuに、國語の接續助詞「て」(te)の轉訛した [ti]を接合したもので、直譯すると「をりて」(wori te)の意で、つまり、口語の「で」の原形といはれる文語の「にて」に該當する」(pp.134)と説明される。一方、「ンジ」は『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』の中で次のような出自の説明がある。すなわち、「-Nziは動詞?icuN「行く」の中止形から派生したもの」(pp.375)である。しかし、津堅島方言の津堅島方言の「ンジ [N&#i]」が上に挙げられた動詞「行く」由来の助詞と判断するのは早急すぎると考える。なぜならば、格助詞「に」と動詞「居る」の活用形の「居て」の結合に由来する助詞である可能性があるからである。この出自に由来する助詞として、たとえば、徳之島亀津方言の「ナンティ [nanti]」(内間直仁(1994))、辺野喜方言の【no:ti·na:ti】(野原三義(1998))、伊江島方言の【naiti·naitu:ti】(生塩睦子(2001))などがある。音韻変化を考えると津堅島方言の「ンジ [N&#i]」もこれらと同様に「に+いて」由来の助詞である可能性が考えられる。今後、言語地理学的観点、音韻論的観点から津堅島方言の「ンジ [N&#i]」の出自を研究する必要がある。それについては次の機会に譲ることとする。
- *4 野原三義氏は首里方言の「カラ」の意味として、「存在確認」[~の中を]としている。存在確認においては「話者が聞き手のお母さんやお父さんを市場や浜で確認したと聞き手に伝えているわけである」と説明されているが、必ずしもそのような状況にのみ「カラ」が用いられるわけではない。また、生塩睦子氏は伊江島方言の「カラ」を「動作の行われる場所や経由点を表す」とし、内間直仁氏は徳之島亀津方言、八重山石垣方言の「カラ」を「動作の行われる場所」としている。
- *5 前部に一個の車輪をつけ、人や荷物を運ぶ手押し車。農作物や土砂などを運搬するのに使用する。

参考・引用文献

- 内間直仁(1994.2)『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院
- 江端義夫(2003.3)「渥美半島方言助詞の研究 前篇」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』pp.71-80
- 生塩睦子(2001.3)「沖縄伊江島方言の格助詞」『日本語の消滅に瀕した方言に関する研究 「環 太平洋の言語」 成果報告書A4-001』pp.222-236
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 編著者(1997.1)『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』三省堂
- 金城朝永(1944.8)『那覇方言概説』三省堂
- 柴田 武(1988.7)『語彙論の方法』三省堂書店
- 名嘉真三成(2000.5)『琉球方言の意味論』(ルック)
- 西岡 敏(2004.1)「沖縄語首里方言助詞「ンカイ」「ナカイ」「ニ」「ガ」「カイ」—共通語の助詞「に」「へ」と対照させつつ」『沖縄国際大学日本語日本文学研究第9巻1号(通巻第14号)』

野原三義（1986.2）『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院

野原三義（1998.12）『新編琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所

藤原与一（1964.12）『方言研究法』東京堂出版

付 記

本稿は2005年11月27日に平成17年度広島大学国語国文学会秋季研究集会で口頭発表したものを加筆改稿したものである。榎木久薫先生はじめ、多くの方々から質問やご示唆をいただいた。原稿加筆にあたっては、江端義夫先生からご指導いただいた。多くの方々に心からお礼申し上げる。

—またよし・さとみ、本学大学院教育学研究科博士課程後期在学—